

第 1 章

脚注と後注

1.1 脚注と後注の使い分け

一般に脚注はできるだけ避けるべきだが、読んでいるページの下部にちょっとした注^{*1}があるのはページをめくる必要がないので便利だ。

しかしときに本文とは別に長い注を書きたくなる場合がある。翻訳本で訳者が著者と異なる見解を持っていて、訳者なりの論旨を展開したい場合^{†1}や、数式の導出の補足^{†2}を行いたい場合などだ。ただし脚注と後注の併用は避けるべきだ。番号や記号の付け方をどう区別したとしても読者を混乱させる可能性があるからだ。この文書はその悪い見本だ。

1.2 脚注や後注^{†3}へのリンク

ところで脚注自体を本文や他の注の中から参照したい場合は `\footnote{}` のカッコ内に `\label{}` を書いておくことで脚注番号が正しく得られ、`hyperref` パッケージを使ってリンクも張れる^{*2}。さきほど挿入した第 1 の脚注の番号とリンクは^{*1}だ。

後注の場合、最近開発中のパッケージである `postnote` を使ってみる。考え方は同じだが参照するとき `\ref{}` の代わりに `\postnoteref{}` を使うと、第 1 の後注の番号が^{†1}、第 2 の後注の番号が^{†2}と正しく得られ、リンクも後注本体へ正しく張られる。

当初期待して試用していたパッケージ `enotez` では、後注の番号は正しく得られるもののリンクが本文の注番号に張られてしまうので、`postnote` に乗り換えた。

*1 ちょっとした注とは、単語の別称などの短く形式的な内容が望ましい。

*2 実は `hyperref` のドキュメントには `footnote` も `endnote` もサポートしないと明記してある。

後注

1. これは訳者の役割を逸脱した越権行為だと言われるかもしれないが、学術本ではときどき見かける。著者から拒否される場合があるだろうが、それは翻訳出版の契約次第だ。
2. 空気密度，対気速度，揚力係数，抗力係数，代表面積をそれぞれ ρ , v , C_L , C_D , S とすると，揚力 L と抗力 D はそれぞれ，

$$L = (1/2)\rho v^2 S C_L, \quad (1.1)$$

$$D = (1/2)\rho v^2 S C_D, \quad (1.2)$$

と書ける。

3. セクションヘッダーへの後注も簡単に付けられる。